見方・考え方を働かせて仲間と一緒に伸びようとする子どもの育成
～日常の事象を課題にした実践を通して～

見附市立見附小学校　関谷　幸輝（平成 27 年度）

主張

本実践は、数学的に考える資質・能力を支え，方向付けるものであり、算数の学習が創造的に行われるために欠かせないものである「数学的な見方・考え方」に着目した。1 時間の授業に注視するのではなく、児童に単元の中核となる考えを習得させるには、単元を通して見方・考え方を働かせる授業を行うことが重要である。

本実践では「あまりのあるわり算」を取り上げる。あまりのあるわり算では、児童はあまりの処理に困難さを感じる。その原因は、商やあまりを出すことのみに終始してしまい、問題場面を既習の「包含除」や「等分除」という見方と結びつけてイメージできていない点にあると考えた。「生じたあまりが何を意味しているのか」を理論的に説明できず、場面に応じたあまりの処理の妥当性を判断できないのではないかと考えた。

そこで、単元を通して、問題文を包含除・等分除のどちらの場面なのか明確にする活動を取り入れた。また、アレイ図を活用し、分け方の手順を可視化する活動を設定した。これにより、「まとまりを作る（包含除)」と「同じ数ずつ配る（等分除)」という構造の違いや、あまりができる過程の違いを捉えさせた。ペアやグループにおいて、アレイ図を基にあまりの処理が妥当か話し合う場を設定した。

この結果、児童は包含除、等分除の見方・考え方を働かせ、あまりが生じるそれぞれのわり算の違いを捉えながら、あまりの処理を考えることができた。また、見方・考え方を働かせるにはアレイ図を活用することが有効であった。立式できない問題に対しても、アレイ図を介することであまりの処理の妥当性について話し合い、解決しようとする姿が見られた。